



Title	〈翻訳〉 我が愛、ニーノシュク（ヨン・フォッセ作）
Author(s)	ランデ・ペータス, アンネ; フォッセ, ヨン
Citation	IDUN –北欧研究–. 2025, 25, p. 201-205
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100761">https://doi.org/10.18910/100761</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[翻訳]

## 我が愛、ニーノシュク ヨン・フォッセ作

翻訳：アンネ・ランデ・ペータス

私はいつもニーノシュクを書いてきた人間のひとりであり、小学校、中学校を通しニーノシュクを学び、高校でもそれを続け、その教育スタイルは昔ながらの様式ではあったが、昔ながらの教育を受けたということはありがたいことで、学校ではいい文を書くことが目的ではなく、できるだけ正しい文を書くことが狙いであったため、〈文学創造の愉悦〉をひとりでこっそり味わうことができたのは幸いなことで、なぜなら〈学校〉とは楽しいところではないと思う生徒は私も含めて過去にも未来にも必ず存在するもので、生徒によっては嫌悪感が引き起こされ、この嫌悪感が学習内容にも定着してしまい、個人的な例を挙げると、ニーノシュクの文章の中に、かつてなら先生が赤字で直しただろうブークモールの言葉を混ぜると独特な喜びが湧き上がり、それは無闇に長い文章を書いたりするときにも味わえるのだが、この喜びは年が経つにつれて減じてきたことも一応断っておくべき事実であろう。とにかく私は学校でほぼ正しいニーノシュクを書くことを習った。

ここで私が曲がりなりにも正しいニーノシュクを書けるよう指導してくれたニーノシュク派の先生たちに改めて謝意を表したい。彼らの努力は感謝されてしかるべきだ。

ベルゲン大学に通い始めた頃、最も大きな影響を受けた先生の多くはいわゆる〈ニーノシュク・インテリ〉で、名前を挙げるならハンス・シェルヴハイム<sup>1</sup>と、特にアトレ・ヒッタン<sup>2</sup>がそうであった。

私は大学時代に新聞記者として働き始めたのだが、それが〔グーラ・ティーデン<sup>3</sup>新聞〕であったため、朝から晩までニーノシュクに浸る日々だった。

22才で文学作家としてサムラーゲ出版社<sup>4</sup>からデビューし、それ以来多くの本や記事を書いてきたが、すべてニーノシュクで書いている。

私はつまり救いようのないニーノシュクの使い手なのだ。

<sup>1</sup> Hans Skjervheim (1926-1999). ノルウェーの哲学者。ベルゲン大学教授。

<sup>2</sup> Atle Kittang (1941-2013). ノルウェーの文学研究家。ベルゲン大学教授。

<sup>3</sup> Gula Tidend, ベルゲンを拠点とし 1904–1995 に発行されたニーノシュクで書かれた新聞。

<sup>4</sup> Det Norske Samlaget (デ・ノルスケ・サムラーゲ). 1868 年の創立以来ニーノシュク書籍のみを出版する出版社。

ここでニーノシュクを支持する私の最強の論拠という本題に入るが、それは「自分はなぜ、自分と数十万人が使用する言語の存在の権利を議論しなければならないのか」と言うことだ。私の言語ではないか？この人生の根幹をなすものとさえ言っていい。私は自分の言語がとても好きだ。その存在を正当化しなければいけないことに屈辱を感じる。もし誰かが私の言語を攻撃してきたり、リアクションは二つに一つだ。その場を立ち去るか相手を殴るか。どちらの手段を取るかは相手の体格次第だけれど。

自分の言語を釈明しなければいけないのは我慢ならない。まるで自分の存在を釈明しなければいけないかのようだ。そんな釈明ができる人などいない。とにかく良くも悪くも自分はここにいる。それ以上言えることなどない。ニーノシュクも同じだ。私もニーノシュクもここにいる。たとえ存在する理由が様々にあり、理解しにくいものだったとしても。

ブークモールも同じだ。良くも悪くもここにある。デンマーク語としてではなく一と言っても、デンマーク語をブークモールに少しでも訳してみれば、これらの言葉がどれほど似ているかすぐに分かるが—〈ノルゲ〉<sup>5</sup>と呼ぶ人もいれば〈ノゥーレーグ〉<sup>6</sup>と呼ぶ人もいるこの不思議な国に住む多くの人々の言語として。だから、ブークモールを攻撃することはブークモールを母国語としている人たちを攻撃することでもある。それより野蛮なことは考えられないくらいだ。だから、ニーノシュクがノルウェーで唯一の言語であるべきだと、ブークモールと戦うのだと、そう言うスローガンには全く共感できない。私がニーノシュクで書くのをやめるとしたら、それはニーノシュクだけをこの国の言語にしようとするニーノシュク擁護派が勝利した場合だけだろう。もしそのようなことが現実となれば、非常に不本意ながら、私はブークモールに移る。だから私が生きている間にニーノシュクだけがノルウェーの言語になることは決してない。

もちろん、ニーノシュクだけがノルウェーの唯一の言語であるべきだと本気で主張する人たちを無視することもできるが、問題なのは、彼らの言い分が、それが社会的な主張であれ国語としての主張であれ、一般的にニーノシュクを支持する人々がよく持ち出す論拠の自然な帰結だということだ。個人的には、いずれの主張も理解できないし、ついていけない、と言う人たちに私は強く共感する。社会的な主張に関して言えば、ノルウェー人の過半数は、東ノルウェーに住み、急進的なブークモール<sup>7</sup>にもっとも近い方言を話している。一方、国語的な主張に関

<sup>5</sup> Norge. ブークモールでの〈ノルウェー〉の綴り方。発音は「ノルゲ」

<sup>6</sup> Noreg. ニーノシュクでの〈ノルウェー〉の綴り方。発音は「ノゥーレーグ」

<sup>7</sup> Radikal bokmål

して言えば、大多数が話している言語が最終的に国語になるのは必然だ。歴史的な視点から見れば話はまた違うだろうが、言語の発展をなかつたことにし、今からみんなでかつて話されていた古ノルド語<sup>8</sup>に戻ろうというのは無理にもほどがある。ニーノシュクの味方をするのなら、今自分が挙げた例より、社会的にも国語的にも、はるか上手くできるはずだと言うことくらいわかっているが、私の挙げたポイントにも納得できる何かがあるはずで、ニーノシュクを主張すること自体に私が違和感を抱いていることもある程度理解していただけるのではないかと思う。しかしこんなことを言いつつその一方で、実は忌み嫌っていることを自らやってしまっているのではないだろうか。つまりニーノシュクを正当化しようとしているのではないか。しかも私が心の奥底でこっそりやってしまっているこの論証の方法に名前を付けるとすれば、これまた強い忌避感を感じる言葉の一つである「文化」を使わなければいけないのでないだろうか。つまり、ニーノシュクを主張する様々な方法の中には〈文化的な主張〉もあるということだ。この主張を用いると、ニーノシュクの確立が正しかったのか間違っていたのか、良かったのか悪かったのかという問題は、ニーノシュクが言語として、そして文学的伝統として既に存在している今、好むと好まざるにかかわらず意味のない問い合わせになるのだ。ニーノシュクで執筆する人は多く、ニーノシュクには多くの素晴らしい文学がある。ニーノシュクとは、私たちが責任を持って守り、伝承していくなければならない書き言葉であり、文化なのだ。人によってはこの責任を喜んで引き受ける者もいる。

ニーノシュクを確立させるためには、かつて様々な議論が必要だった。しかしニーノシュクが確立された今、議論は必要ない。ニーノシュクはここにあり、あり続ける。言い換えると、人間が生まれたら、その人間がここにいることが正しいか間違っているかを問う者はいない。そしてその人間がある書き言葉を習得したのなら、その言語に存在の権利があるかどうかも、同様にもう問題ではないのだ。

ニーノシュク普及活動へのインスピレーションにはならないかもしれないが、ニーノシュクが生きた言語として、消えてはいけないということに一般的な同意があるのであれば、ニーノシュク教育が行われていることと、そのための活動が組織化されていることが重要だ。それは必要不可欠なことだ。ニーノシュクが自分の言語だと言う人々が自由にそれを使えることも必要不可欠なことだ。知っての通り、そうでない例は多くある。ニーノシュクを書く人、ブークモールを書く人を問わず、誰もがニーノシュク文学の質の高さに目を開いていくことが、ニー

---

<sup>8</sup> Gamalnorsk

ノシュクを書く人の状況の向上に繋がるのではないかと私は思う。ガルボルグ<sup>9</sup>からヴィニエ<sup>10</sup>まで。加えてハウゲ<sup>11</sup>、ハウゲン<sup>12</sup>、フロエグスタ<sup>13</sup>や、ルンデン<sup>14</sup>やホヴランド<sup>15</sup>も知ってほしい。大衆にはあまり受けない文学かも知れないが、ニーノシュクが受けたことなどどのみちなのだ。物事を左右するのが必ずしも大衆の好みではないことに心底ほっとする。農民や漁師や労働者の多くはニーノシュクを使用する。ニーノシュクが強い地域では特にそうだ。しかし全国的にみると、かつてニーノシュクが導入された当時も、その後も、この言語を最も支持してきたのはこのグループに属する人々ではない。好むと好まざるにかかわらず、それが事実だ。

したがってニーノシュクのために我々が何をすれば一番いいのかと言うと、まずは既になされている通り、ニーノシュク教育に注力すること、いわゆる教育分野におけるニーノシュク運動<sup>16</sup>だ。それと同時にニーノシュク文学とその文学に関する知識をニーノシュクの使い手とそれ以外の人々に広めるよう努力することだろう。

『ノルウェー語教師』<sup>17</sup>1992年掲載

<sup>9</sup> Arne Garborg (1851 - 1924) ノルウェーの作家

<sup>10</sup> Aasmund Olavsson Vinje (1818 - 1870) ノルウェーの作家

<sup>11</sup> Olav H. Hauge (1908 - 1994) ノルウェーの作家

<sup>12</sup> Paal-Helge Haugen (1945 - ) ノルウェーの詩人 「ハウゲン」とは良くある苗字だが、この詩人だろうと思われる（訳者）

<sup>13</sup> Kjartan Fløgstad (1944 - ) ノルウェーの作家

<sup>14</sup> Eldrid Lunden (1940 - ) ノルウェーの詩人

<sup>15</sup> Ragnar Hovland (1952 - ) ノルウェーの作家

<sup>16</sup> Skolemålsarbeid

<sup>17</sup> Norsk læraren ノルウェーの国語教師のための学術雑誌（年四回刊）

# My Dear Nynorsk

An essay by Jon Fosse, translated into Japanese

## Summary

by Anne Lande Peters

The text is a translation of an essay written by Jon Fosse in 1992, published in the periodical “Norsklæraren” (Teacher of Norwegian Language), where he shares his personal feelings for his native written language, nynorsk. Jon Fosse expresses his dislike of arguing for the existence of Nynorsk; just like no one questions the existence of a child once it is born, it is meaningless to discuss the existence of nynorsk now that it is created. He further discusses what one can do to spread support and understanding for nynorsk and argues that the continued education of nynorsk in schools, and the work to spread high quality nynorsk literature to both nynorsk users and non-nynorsk users, is the key.

## 参考文献（原文）

Fosse, Jon 1999. *Gnostiske Essay*. Oslo: Det Norske Samlaget, 115-119.